

差別、偏見

清風南海中学校 二年 鈴木 日満里

私は先日、駅で車椅子に乗っている方を見かけました。そして、自分の中にあつた無意識な偏見に気付きました。それは、車椅子に乗っていたのは、近くに居た友達とお揃いの派手なTシャツを着ている高校生くらいの女の子だったからです。その女の子は、友達と大きな声で笑いながら車椅子用の少し広めの改札を通ってきました。

私は衝撃を受けました。よく考えれば、車椅子の人だって友達と遊びに行くことだってあります。派手な服を着ることだってあります。それなのになぜ、私は彼女を見たときに驚いたのか。私が無意識のうちに、車椅子に乗っているのは穏やかで物静かな人、という偏見を持っていたからです。

「障害者」というくくりの中には、様々な人が入るのです。一概に「障害者に優しくしましょう」などと言つたところで、その人が何に困っているのか、どうしてほしいのか、というのは一人一人違うはず。勝手に自分で判断し、自己満足で助けたつもりになつていても、それが結局障害を持った方の手助けになつていいのか、と問われるとうなずけないところがあります。

では、一人一人違う障害者の方と接するのはどうすれば良いのでしょうか。自分の中の無意識な偏見で傷付けてしまつたり、良かれと思って行動したことが迷惑になつてしまつたりするのは避けたいはず。どうしたら良いのだろう、どうするのが最適だろうと考えているうちに、ふと一人一人違うのは健常者も同じであると気付きました。

どうして、健常者だと普通に接することができて、そこに少し何かの障害があると上手に接することができなくなるのでしょうか。絶対にこの両者に特別な違いがあるとは思えません。きっと私が勝手に障害者の方と接するのは難しいと思います。

そのことを踏まえた上で、もう一度障害のある方とどう接すれば良いかを考えると、答えが見えてきました。普通にすれば良いのです。特別に気を配り緊張するのではなくて普通に。だって、障害者は健常者と何も変わらないのですから。ただ少し、困っているようなときは、勝手に押し付けるのではなく、相手に詳しく聞いてから、自分が何貢献することができるかを考えたら良いと思います。

今回、障害のある方のことについてたくさん考えたときに、自分は実はたくさん偏見や思い込みをしているのだと気付きました。差別が好きなんなんて、世の中には少ないと思います。私も差別は許せないし、したくありません。でも実際には心の中で無意識に差別をしていました。気付いたときはショックで、申し訳ない気持ちになりました。

このことを深く反省し、今回気付くことのできたものを胸に刻んでおこうと思います。また、差別や偏見について自分を見つめ直すというのは日頃あまりすることができないので、こういった機会を大切にしていくていいなと思います。そしていつかは、自分の中の差別や偏見をなくしたいです。